

研究で、太陽黒点数や歳差運動による太陽放射量の違い、または海洋にその原因を求めた。人類が初めて協力した国際地球観測年 (IGY) に、ハワイのマウナロア山で始まった二酸化炭素濃度の観測は、キーリングという自然をこよなく愛した若者が選んだテーマであった。温室効果による温暖化研究を進めたのは G. プラスで、氷河時代は大気中の CO₂ の変化によって説明できるという疑わしい理論を目にし、兵器研究の息抜きとして行ったものだという。若きキーリングはプラスの論文に感銘し、精度の高い測定に挑み、基線レベルの測定に成功する。この際には冷戦があり、米軍が気前よく出した資金の極く一部をキーリングに転用したもので、1963年には資金不足で、一時観測が中断した。事の本質を理解していたのは少数の科学者達であった。

観測データが蓄積されるにつれ本質が理解されるとともに、環境への関心は急速に高まる。化石燃料の消費量増大、大気中の CO₂ 濃度の経年的増加、地球の平均気温の経年的上昇が示され、温暖化の状況証拠が明らかにされた。温暖化の発見である。2000年代には世界中の膨大な数の科学者・組織が関わり、地球最大の問題となったといっても過言ではない。

以上の流れは 2008 年洞爺湖サミットへと進んでいることは周知の事実である。温暖化の兆候が世界各地から伝えられ、温暖化は事実であるという社会状況の中にありながら、それでも温暖化を二酸化炭素の問題だけに矮小化して批判したり、原油の元栓を締めてしまえば済むことだと他人事の発言をする識者、もっと重要なことがあると主張してどことなく現状肯定してしまいたくなるような状況を生み出してはいないだろうか。対策面では、ライフスタイルや社会システムの重要性以上に、技術が最重要課題、技術が解決という主張が強いのではないかと、技術が何とかしてくれる、何とかして欲しいという願望が我々の技術信奉社会にはあるのではないだろうか？ そうならば、本書が提示している課題をもう一度真摯に受け止め、考える必要があると評者は考えている。

なお、本書には気になる指摘がいくつかある。人類が未来にどのように行動したらよいかを主題にしたものではないと冒頭に述べているが、最終章で貴重な指摘をしている。アメリカ人に対して、化石燃料に対する政府の助成金をやめにし、ガソリン税を

値上げしたらどうかと、今現在の原油価格高騰やガソリン特別税で大騒ぎしている状況にも示唆を与えるものであろう。大気は「コモンズ (共有地)」の典型例という指摘も重要である。

しかし、曲がりなりにも気候学を専攻してきたつもりの評者には、随所に「気候の科学は眠くなりそうなよみだった」とか「過去の単なる統計」、「大学の気候学者は地理学科にいてだけで、気象学の最も退屈な分科」という指摘は看過することができない。科学とは少数の天才だけがやればよいというのであろうか。「The Day after Tomorrow」流に考えれば、ニューヨーク国立図書館に納められた超貴重と思われる図書も寒冷低気圧に閉じ込められた少年達の命を救うための「暖房材」としての意味しかないのだろうか？ 現在出版されている膨大な書物も温暖化の次にやってくるといわれている寒冷化の中で暖を取るために役立つだけなのだろうか？ 本書は選ばれた 1,000 編の重要論文を点と点でつないだ科学史である。だからといって、その周辺で行われた膨大な研究や研究論文は全く意味がないとはいえないのではないかと、その中には貴重な指摘や重要な発見が隠されているのではないかと、本書を読んで感じた次第である。巻末の文献リスト、訳者増田による解説は非常に参考になる。なお、翻訳という仕事はともすれば軽視されがち傾向にあるが、ここに紹介した二書を手に取り、あらためて翻訳という文化活動を見直した次第である。

(山下脩二)

山下清海編：エスニック・ワールド——世界と日本のエスニック社会——。明石書店、2008 年、257p.、2,200 円。

本書は、この一冊で世界および日本のエスニック社会の歴史、現状、課題などがわかることを目指して編まれている。フィールドワークを積み重ねてきた総勢 18 名の地理学者が、それぞれのフィールドで生じているエスニック社会をめぐる最近の現象を紹介している。各項目は短いながらも執筆者の撮影した写真や図表が添えられ、現地の状況が生き生きと描かれている。加えて、20 編に及ぶコラムは主として執筆者が経験したエスニック社会が等身大で紹介されており、臨場感が伝わってくる。

さて、本書のキーワードはタイトルにあるエスニ

ック、およびエスニシティである。これらの概念規定は困難であり、その困難である所以は本書を通読すると納得できる。したがって概念規定は不可能というのではあまりに無責任なので、困難である所以について、本題に入る前にエスニシティ概念をわかりやすく整理しているフランス語圏で活躍する社会学者のマルティニエッロの議論を参照しつつ確認しておきたい。マルティニエッロによるとエスニシティとは、常時最小限の相互行為が行われている他の諸集団の成員と文化的に異なっていると自ら見なし、他者からもそのように見なされている、社会的諸行為者の間の社会関係の一側面である(2002: 27)。英語圏ではエスニックという概念が一般に学術用語のレベルで登場するようになったのは1970年代以降であるが、フランス語圏においてエスニシティが問題化されるのは1980年代終わりから1990年代の初めにかけてであった(マルティニエッロ 2002: 7-13)。英語圏とフランス語圏において問題化される時期が違うのは、エスニック集団の存在の有無にかかわらず、問題が可視化される時期が違うからである。また、グローバル化が一樣に進まないように、エスニシティやそれに連動する現象も一樣に発現しないため、エスニシティ概念の規定が非常に困難であり、その解釈も多様にならざるを得ないのである。それゆえ本書の執筆者においても各社会においてエスニック社会をとらえる視点や解釈に違いがみられるのも納得がいく。これらのことを踏まえた上で、編者が「はじめに」で述べているように、世界および日本のエスニック社会を知るといふ本書の企図を軸に書評を試みることにする。

本書の構成は、エスニック社会をめぐる基礎的概念、世界のエスニック社会、日本のエスニック社会の3章からなっている。第I章ではエスニック社会の見方、研究の方法などを理解するのに役に立つ内容となっており、エスニック集団とエスニシティ(杉浦直)、エスニック集団の適応戦略(矢ヶ崎典隆)、エスニック集団の住み分けとエスニックタウン(山下清海)、エスニック・ビジネス(片岡博美)、エスニック地理学の研究史(千葉立也)という五つのテーマに分かれている。

第II章では、四つの分野において15の世界のエスニック社会が紹介されている。まず、「海外の移民社会」として日系人(飯田耕二郎)、華人(山下清海)、インド人(南埜猛)が取り上げられてい

る。ここでは移民に焦点が絞られ、主として19世紀から20世紀にかけて植民地主義や戦争を背景に人々が世界各地に移動し社会を築いてきた状況が紹介されている。各項目ともに比較的最近の日本に関連した変化に多少なりとも言及がなされ、第III章の日本のエスニック社会(華人社会、ブラジル人社会、インド人社会)の伏線になっている。これに対し、次に続く三つの節では地域に視点を定めてエスニック社会がとらえられている。「南北アメリカのエスニック社会」では、アメリカ合衆国(矢ヶ崎典隆)、カナダ(大石太郎)、ブラジル(仁平尊明)、「ヨーロッパのエスニック社会」では、イギリス(杉浦直)、ドイツ(加賀美雅弘)、フランス(手塚章)、スペイン(石井久生)、オランダ(大島規江)、「アジア・オセアニアのエスニック社会」では、中国(杜国慶)、シンガポール(山下清海)、タイ・ラオス(横山智)、オーストラリア(吉田道代)におけるエスニック社会が紹介されている。後3節で取り上げられた12のエスニック社会について、それぞれのあり方やエスニック社会をめぐる現象の特徴がホスト社会との関係において浮かび上がってきて興味深い。具体的には、同じヨーロッパでも移民に由来するエスニック社会に寛容なオランダに対し、それに対照的な態度を示すフランス、各国の事情によって移民受入れの時期が異なり、それによってもホスト社会における移民社会の位置づけは異なってくる。また、国民国家形成の過程で顕在化してきたエスニック社会としてスペインの言語を核とした地域主義、中国やラオスの多民族的状況、逆に民族を区分せずに国民としての統一を試みているタイの各例を比較するのも面白い。そして、植民地主義を背景に移民によって形成されたシンガポールや、オーストラリア(コラム参照)のエスニック社会では、後から来た移民が先住民の人権や活動空間を奪ってきた問題を共有しており、この状況は次章のアイヌにも通じる。

第III章の日本のエスニック社会では、日本に視点を移し、アイヌ(千葉立也)、コリアン(福本拓、千葉立也)、華人(山下清海)、ブラジル人(片岡博美)、インド人(澤宗則)のエスニック社会が紹介されている。本章は、(日本語)読者自身が日本社会において自らもエスニック社会をめぐる問題に関わっていることを当事者として再認識する手掛かりとなろう。本章を読めば、日本において、

「一般の普通の日本人とは多少区別される『民族系』の人々……(評者略)をエスニック集団」(14ページ)としてとらえるようなまなざしの背後に、日本の「『単一民族社会』がよい社会だという自己満足にひたっている姿」(209ページ)が見え隠れしていることに気づくであろう。そもそも「一般の普通の日本人」とは誰のことなのか、そこで差異化される人々との間に引かれる境界線はどのようなものなのか、これらを考えることが「異文化」理解に不可欠であることは言を俟たない。

最後に要望をいくつか付言しておきたい。本書はエスニック社会を広く知るのに最適であり、また地理学に限らず高等教育の教科書としてもお勧めである。そのためにも巻末の「エスニック社会を知るための文献案内」は地理学の文献に絞らず、すでに蓄積もある社会学や文化人類学の基本文献の紹介が(若干あるが)もう少し欲しかった。さらに欲を言えばエスニック集団が運営しているHPのサイトがあればエスニック集団の動きをリアルタイムで知る手掛かりとなるであろう。執筆者の多くは編者が研究代表者を務める科学研究費基盤研究「日本におけるエスニック地理学の構築のための理論的および実証的研究」の研究分担者であり、本書はその研究プロジェクトの成果の一部という位置づけがなされている。「エスニック地理学」を構築することで地理学の専門分野を確立するだけでなく、国境を越えて「エスニック社会」を形成する移民のように、エスニック地理学研究も隣接諸科学に根を下ろしつつ展開することになればよいと思う。グローバル化の浸透、その返す波としてナショナリズムの高揚、これらの過程で顕在化してきたエスニシティをめぐる現象、これらが作用する動態的な過程で形成されてきた各地のエスニック社会は、繰り返しになるが、決して一様ではない。しかしながら、非常に困難であることを知りながらも、本書の各論が布置されるような背景としてのグローバルなエスニック・ワールドを第2弾で展望したいと思うのは評者だけではないであろう。

文 献

マルチニエッロ, M. 著, 宮島 喬訳 2002. 『エスニシティの社会学』白水社. Martiniello, M. 1995. *L'Ethnicite dans les sciences sociales contemporaines*. Paris: Presses Universitaires de

France.

(森本 泉)

荒井良雄・岡本耕平・田原裕子・柴 彦威編：中国都市の生活空間. ナカニシヤ出版, 2008年, 192p., 3,700円

本書は、中国都市における住民の生活空間の特質を、時間地理学の枠組を援用しながら、社会のジェンダー構造や高齢化の問題に焦点を当てつつ論じた研究書であり、2001年から2005年にかけて行われた科学研究費に基づく日中共同研究の成果である。

本書には全巻を通じて日本との比較の視点も貫かれている。日本は、東アジアの家族観の伝統を残しつつも西欧的近代資本主義社会を形成し、すでに都市の成熟期にある。これに対して中国は、社会主義社会の枠組を残しつつ開放経済に移行し、急速な都市成長の過程にある。両国は、社会制度の隔たりこそ大きいものの、家族観は東アジア的共通性を持っており、近年著しい出生率の低下と急速な高齢化を共に経験している。比較の視点が有効であるとされる所以である。

本書の編者中、荒井良雄と岡本耕平は日本における時間地理学研究を先導してきた都市地理学者であり、田原裕子は高齢者福祉の問題を扱ってきた社会地理学者である。また柴 彦威は、日本留学中に時間地理学的視点を導入しつつ中国都市の単位空間を見事にとらえ、また帰国後も都市構造を時間地理学的にとらえた研究書(たとえば、柴 1999)を公開している中国人地理学者である。本書の執筆者には、このほか時間地理学研究の新進西村雄一郎と日本留学の若手研究者劉 燕が加わり、本書の意図にふさわしい布陣となっている。

本書の構成は2部9章からなり、第1部では中国都市の「社会構造の変質と生活空間の変貌」が、ジェンダーの視点に留意しつつ多面的に論じられる。

まず第1章「外出活動の日中都市比較」(荒井良雄)では、日中各3都市で実施された生活時間調査の比較検討が行われ、中国の外出活動の特徴としては、①夫と妻に就業率や就業空間について差が無いこと、②就業空間とその他の活動空間の差が小さいことを挙げている。また日本の大都市郊外では電車社会、地方都市では車社会の時間規律が働くのに対して、中国都市では徒歩社会の時間規律が働くこと